95歳 児童見守り35年

左京の元小学校教諭

95歳の元小学校教諭、三宅武三郎さん＝京都市左京区松ケ崎＝が35年間、松ケ崎小の通学路で児童の見守り活動を続けている。交通事故に遭わないよう気を配り、「頑張れーい」と毎日エールを送ってきた。足が不自由なため、電動車いすで自宅から現地まで通う。今春には腰を骨折した。それでも「社会で子どもを育てることが大事。生きている間はやり続けたい」と、今日も児童に優しい瞳を向けている。

「元気か？今日も頑張れーい」・登校時の松ケ崎小の児童に笑顔で声をかける三宅さん（京都市左京区松ケ崎）

9月上旬の平日、午前8時。三宅さんが「はよ来ーい」と登校してくる児童に声を掛けていた。時間が分かるよう時計を持参し、青信号になると大きな声で「行けー！」と旗を振る。松ケ崎小近くの横断歩道で、毎朝見られる光景だ。

雨の日も雪の日も立ち続けてきた。遅れてきた子がいれば「元気か」と言葉を交わす。共働きの家庭が増え、朝食を食べない子もいる。「子どもにも悩みがある。聞いてあげる人が必要や」。自宅に遊びに来る児童もおり、「三宅のおっちゃん」と親しまれている。

抑留経験「子どもが平和つくる」

1974年に大薮小（南区）の校長を退職してから、見守り活動を続けてきた。28歳で招集され、戦場へ送られた。戦後はシベリアに抑留され、極寒の地で強制労働をさせられた。その経験から「子どもたちを真っすぐな人間に育てることが、平和な日本につながる」と信念を抱くようになった。

現在は体が衰え、歩行も不自由になったが、活動をやめる気はない。「子どもを見守るのがわしの仕事。まだ達者なんやから、世の中に尽くしたい」と気持ちは年齢に負けていない。

（中塩路良平）